



中国緑茶産地における産地システムの変化と今後の展望

瞿, 倩倩

(Degree)

博士 (農学)

(Date of Degree)

2019-03-25

(Date of Publication)

2021-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7522号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007522>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文内容の要旨

氏 名 _____ 瞿 倩倩 _____

専攻・講座 _____ 食料共生システム学・食料環境経済学 _____

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

中国緑茶産地における産地システムの変化と今後の展望

指導教員 _____ 小野 雅之 _____

中国は茶、特に緑茶の世界最大の生産国であり、消費国でもある。茶の栽培面積と生産量は、2000年109万ha、68万tから2015年には279万ha、225万tへと大きく増加している。同時に、経済成長による所得の増加と消費飲料の湯から茶への変化によって、茶の消費量も増加した。このような茶生産・消費の増加のもとで産地の茶生産・販売システムにも変化が生じていると考えられるが、その実態が明らかにされているとは言えない。本論文は、緑茶の銘柄産地の一つである河南省信陽市を対象に、茶生産増加にともなう産地システムの変化を明らかにするとともに、今後の展望を検討したものである。

ところで、茶は、茶園での茶樹の栽培－生葉の摘採－加工のプロセスを経て製品化して販売されるものであり、このプロセスには生葉流通と製品茶流通の二つの流通過程も含まれる。同時に、このプロセスには茶樹の栽培と生葉の摘採、生葉の流通、製品茶の加工、製品茶の販売の各段階に様々な主体が存在する。本論文では、このような茶樹の栽培から製品茶の販売にいたるまでの産地におけるプロセスと、そのなかで形成されている主体間の関係を産地システムと捉えていることが、第一の特徴である。

また、生葉の摘採と1990年代までの製品茶の加工は手作業で行われてきたことから、茶樹の栽培から製品茶の加工までのプロセスは小規模・零細な主体によって担われてきた。しかし、2000年代に入って加工過程の機械化が進んだことから加工段階の大規模化が進むとともに、1990年代半ば以降の中国政府による農業産業化政策の推進のもとで、茶産地においても龍頭企業や農民專業合作社などによる垂直統合が進んできている。そこで、本論文では多様な主体による垂直統合の進展の面から、産地システムの変化を捉えようとしている点に、第二の特徴がある。

以上のように、本論文では緑茶産地における産地システムの変化を、主として垂直統合の視点から捉えることを目的としている。その際に、中国の茶産地システムに関する先行研究が、輸出向けウーロン茶産地を対象に特定の主体によって形成されたシステムに限定されているなかで、本論文では中国における茶生産量の67%を占める緑茶産地を対象に、多様な主体による垂直統合の進展によって多層的な産地システムが形成されているものと捉えたいので、主なタイプとして4つのタイプを析出し、それぞれについて詳細な分析を行った点に、第三の特徴がある。

分析にあたって、本論文は、バリューチェーンの概念に基づいて垂直統合を、統合の経済性、需要と供給の確保、取引の圧力をかわしナマの原価のつかみ、差別化の強化、参入または移動障壁、収益の高い事業への参入、系列化が進む中で自衛上必要の7つ視点の中、異なる統合主体にとって重要なものを検討する。

本論文は、序章および終章を含めた8章から構成されている。以下、その内容を簡略に述べる。

序章では、上述したような研究の背景を述べるとともに、先行研究の検討を踏まえて本

論文の課題と研究の視点、方法について述べている。これまでの茶産地システムに関する研究は茶生産・流通の主体間の結合関係を単一システムとして捉えていることに対して、本論文では、複数システムとして捉えたい。

第1章では、中国における茶の生産流通の歴史の変遷を整理したうえで、生産・流通の課題として、加工過程の機械化によって大規模化した加工企業にとっての小規模・零細な農民経営からの加工原料生葉の安定調達、農民による小規模生産・加工の大規模化・効率化、生産量の急増による産地内の品質のばらつきの解消とブランド化、などを指摘している。

第2章では、研究対象である河南省信陽市における生葉生産・加工・販売の特徴と歴史的な展開のなかで形成されてきた垂直的統合のタイプを整理している。信陽市で生産される信陽毛尖は、新芽が開かないうちに手作業で摘採し、その日のうちに加工されるという商品特性・加工特性と、主な摘採期間が4月上旬から下旬に限定されていることから、生葉生産・加工過程の小規模・零細性を特徴とすること、栽培面積の急速な拡大によって摘採労働力の不足と生葉の品質のばらつきが拡大していること、茶農による自家加工・販売と販売企業への製品茶の販売に加えて、2000年代半ばから茶販売企業や加工企業による垂直統合が進むとともに、2010年代には農民專業合作社による垂直統合も進んでおり、現在では7タイプの産地システムが形成されていること、などを明らかにしている。また、信陽市の消費者アンケートに基づいて、消費飲料が湯から茶に移行していること、自家用と贈答用では購入する茶の品質・価格や購入先が異なっていること、などを明らかにしている。さらに、信陽毛尖の主な需要が、2000年代半ばまでの各級政府機関や企業の贈答用需要から、それ以降は消費者の自家消費および贈答用需要へと変化していることを明らかにしている。

続く第3章～第6章では、第2章で析出した7つのタイプのうち、茶農による自家加工・販売（第3章）、小売企業による加工過程の後方統合（第4章）、小売企業による加工過程および生葉生産過程の後方統合（第5章）、農民專業合作社による加工・販売過程の前方統合（第6章）、の事例を実態調査に基づいて詳細に分析している。

第3章では、信陽市における産地システムの基層にある茶農による自家加工・販売のなかで、借地により大規模化した茶農を取り上げて分析している。事例の茶農の経営分析の結果、小規模茶農に対して生産性の優位性があり、茶園借入と加工機械購入のための資金が確保、摘採労働力の確保ができれば、今後も大規模茶農が増加する可能性があること、販売面ではブランド化が課題となることを指摘している。

第4章では、2000年代に入って茶流通企業のなかにそれ以前の茶農が加工した製品茶の仕入・販売から、加工過程を直営する動向が現れたことに着目し、それによって急成長した企業を分析している。その結果、加工過程の直営化と茶農の組織化による垂直統合が、製品カテゴリーとポジションの明確化とブランドの構築が可能にしたことを明らかにしている。

第5章では、加工過程の統合に加えて生葉生産過程までを統合（直営化）した加工・販売企業の事例を分析し、生葉生産の直営化によって、それ以前の茶農との契約による生葉調達に比べて、調達コストの削減と茶の品質保証につながったことを明らかにしている。また、茶園を貸し付けている茶農の経営の変化を分析し、茶園流動化の推進のためには労働市場の拡大が必要であることを指摘している。

第6章では、直営小売店の設置とインターネット販売によって消費者向け販売を拡大している2つの農民專業合作社を事例に、前方統合の意義を考察している。この2事例では、信陽毛尖をめぐる2010年代の販売環境の変化に対応して、農民專業合作社が小売段階を前方統合し、消費者向け販売チャネルを管理することによって販売量の増加が可能になったこと、それが合作社社員である茶農の生葉の安定販売にもつながっていること、を明らかにしている。

終章では、以上の各章の結果を踏まえて、茶産地システムの垂直統合の意義を、加工・販売企業や農民專業合作社にとっては高品質生葉の安定調達とブランド化が可能になること、茶農にとっては市場リスク軽減と経営安定化、所得向上につながることを指摘している。さらに、生産・流通の垂直産地システムの今後の方向と課題を考察し、生葉生産から販売にいたるまでの垂直統合がさらに進展する可能性があること、それによって消費者の高品質・高級茶志向の強まりに対応した産地ブランドと企業ブランドを並進的に向上させていくことが必要であることを、を提示している。

氏名	瞿 倩倩		
論文 題目	中国緑茶産地における産地システムの変化と今後の展望		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	小野 雅之
	副査	教授	金子 治平
	副査	准教授	中塚 雅也
	副査		
	副査		

印

印

要 旨

中国は茶、特に緑茶の世界最大の生産国であり、茶の栽培面積と生産量は、2000年109万ha、68万tから2015年には279万ha、225万tへと大きく増加してきた。同時に、経済成長による所得の増加と消費飲料の湯から茶への変化によって、茶の消費量も増加した。このような茶生産・消費の増加のもとで産地の茶生産・販売システムにも変化が生じていると考えられるが、その実態や要因が明らかにされていないとは言えない。本論文は、緑茶の銘柄産地の一つである河南省信陽市を対象に、茶生産増加にともなう産地システムの変化を明らかにするとともに、今後の展望を検討したものである。

ところで、茶は、茶園での茶樹の栽培－生葉の摘採－加工のプロセスを経て製品化して販売されるものであり、このプロセスには生葉流通と製品茶流通の二つの流通過程も含まれる。この茶樹の栽培から製品茶の小売までのプロセスの各段階は、様々な主体によって担われている。本論文では、このような茶樹の栽培から製品茶の販売にいたるまでの産地におけるプロセスと、そのなかで形成されている主体間の関係を産地システムと捉えたことが、研究上の意義の第一の点である。

また、生葉の摘採と1990年代までの製品茶の加工は手作業で行われており、茶樹の栽培から製品茶の加工までのプロセスは小規模・零細な農民によって担われてきた。しかし、1990年代半ば以降の中国政府による農業産業化政策の推進のもとで、茶産地においても龍頭企業や農民專業合作社などが加工段階に参入し、しかも2000年代に入って加工過程の機械化が進んだことから、龍頭企業や農民專業合作社、特に前者による大規模機械加工が進むとともに、茶樹の栽培から製品茶の小売までのプロセスの垂直統合が進んできている。そこで、本論文では多様な主体による垂直統合の進展の面から、産地システムの変化を捉えようとしている点に、第二の研究上の意義がある。

以上のように、本論文では緑茶産地における産地システムの変化を、主として垂直統合の視点から捉えることを目的としている。その際に、M.E.Porterのバリューチェーン概念と垂直統合の理論を、茶産地システムに応用して分析を行っている点に、本論文の第三の研究上の意義がある。

さらに、中国の茶産地システムに関する先行研究が、特定の主体によって形成されたシステムに限定されているなかで、本論文では中国における茶生産量の67%を占める緑茶産地を対象に、多様な主体による垂直統合の進展によって多層的な産地システムが形成されているものと捉えようとして、主なタイプとして5つのタイプを析出し、それぞれについて詳細な分析を行った点に第四の研究上の意義がある。

本論文は、序章および終章を含めた9章から構成されている。以下、その内容を簡略に述べる。

序章では、上述したような研究の背景を述べるとともに、先行研究の検討を踏まえて本論文の課題と研究の視点、方法について述べている。

第1章では、中国における茶の生産流通の歴史的変遷を整理したうえで、加工過程の機械化によって大規模化した加工企業にとつての小規模・零細な農民経営からの加工原料生葉の安定調達、農民による小規模生産・加工の大規模化・効率化、生産量の急増による産地内の品質のばらつき解消とブランド化、などの茶産地の課題を指摘している。

第2章では、研究対象である河南省信陽市における生葉生産・加工・販売の特徴と歴史的展開のなかで形成されてきた垂直統合のタイプを整理している。信陽市で生産される信陽毛尖は、開く前の新

氏名	瞿 倩倩
<p>芽を手作業で摘採し、直ちに加工する労働集約的な生産・加工特性と、主な摘採期間が4月上旬から下旬に限定されていることから、歴史的に生葉生産・加工過程の小規模・零細性を特徴としたことを指摘した上で、現在では7タイプの産地システム(①茶農による自家加工・販売、②販売企業による茶農からの製品茶の買付・販売、③加工企業による生葉買付・加工、④加工企業による小売段階の垂直統合、⑤農民專業合作社による社員からの生葉買付・加工、⑥農民專業合作社による小売段階の垂直統合、⑦加工企業による生葉生産段階から小売段階までの垂直統合)が形成されていること、製品茶の主な販売先が1990年代の各段階の政府や企業から、2000年代には消費者向けに変化したこと、を明らかにしている。また、信陽市の消費者アンケートに基づいて、消費飲料が湯から茶に移行していること、自家用と贈答用では購入する茶の品質・価格や購入先が異なっていること、などを明らかにしている。さらに、信陽毛尖の主な需要が、2000年代半ばまでの各級政府機関や企業の贈答用需要から、それ以降は消費者の自家消費および贈答用需要へと変化していることを明らかにしている。</p>	
<p>続く第3章～第7章では、第2章で析出した7つのタイプのうち、販売企業による生葉買付(第3章:タイプ②)、小売企業による加工過程の統合(第4章:タイプ②から③への移行)、小売企業による加工過程および生葉生産過程の統合(第5章:タイプ③から④へ、さらに⑦への移行)、農民專業合作社による加工・販売過程の統合(第6章:タイプ⑤から⑥への移行)、茶農による大規模加工・販売(第7章:タイプ②)、の事例を実態調査に基づいて詳細に分析している。</p>	
<p>第3章では、1990年代に形成された茶農からの製品茶を買付け、政府機や企業に販売する事例を分析し、2000年代に信陽市で消費者向け販売が増加するなかで、現在では従来の産地システムに限界が見られることを指摘している。</p>	
<p>第4章では、2000年代に入って現れた、茶販売企業が加工過程を直営化し、消費者向け販売を中心とすることによって急成長した企業を分析している。その結果、加工過程の直営化と茶農の組織化による垂直統合が、製品カテゴリーとポジションの明確化によるブランドの構築を可能にしたことを明らかにしている。</p>	
<p>第5章では、加工過程の統合に加えて生葉生産過程までを統合(直営化)した加工・販売企業の事例を分析し、生葉生産の直営化によって、それ以前の茶農との契約による生葉調達に比べて、調達コストの削減と茶の品質保証につながったことを明らかにしている。また、茶園を貸し付けている茶農の経営の変化を分析し、茶園流動化の推進のためには労働市場の拡大が必要であることを指摘している。</p>	
<p>第6章では、直営小売店の設置とインターネット販売によって消費者向け販売を拡大している2つの農民專業合作社を事例に、前方統合の意義を考察している。この2事例では、信陽毛尖をめぐる2010年代の販売環境の変化に対応して、農民專業合作社が小売段階を前方統合し、消費者向け販売チャネルを管理することによって販売量の増加が可能になったこと、それが合作社社員である茶農の生葉の安定販売にもつながっていること、を明らかにしている。</p>	
<p>第7章では、借地により大規模化した茶農の事例分析により、大規模茶農形成の可能性を検討している。事例の茶農の経営分析の結果、小規模茶農に対して生産性の優位性があり、茶園借入と加工機械購入のための資金確保、摘採労働力の確保ができれば、今後も大規模茶農が増加する可能性があることを指摘している。</p>	
<p>終章では、以上の各章の結果を踏まえて、茶産地システムの垂直統合の意義を、加工・販売企業や農民專業合作社にとつては高品質生葉の安定調達とブランド化が可能になること、茶農にとつては市場リスクの軽減と経営安定化、所得向上につながることを指摘している。さらに、生産・流通の垂直産地システムの今後の方向と課題を考察し、生葉生産から販売にいたるまでの垂直統合がさらに進展する可能性があることを、特に前述の7つのタイプのなかで⑥、⑦が中心となった産地システムが形成されていく可能性があることを指摘するとともに、今後は消費者の高品質・高級茶志向の強まりに対応して、産地ブランドと企業ブランドを並進的に向上させていくことが必要であることを提示している。</p>	
<p>このように、本論文は、緑茶の銘柄産地である河南省信陽市を対象に、産地システムを垂直統合の視点から研究したものであり、多様な主体による多層的な産地システムの形成過程とその要因、今後の展望について多くの重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。</p>	
<p>よって、学位申請者の瞿 倩倩は、博士(農学)の学位を得る資格があると認める。</p>	